

麻酔科後期研修プログラム

基本理念

2年間の卒後臨床研修で身に付けた基本的な診療能力、判断力を元に、将来のいかなる専門性にも柔軟かつ確実に対応できる総合的な臨床能力を取得し、コミュニケーション能力も備えた医師としての成長を目指す。

研修期間

原則として3年間（短期間の希望も可能）

研修プログラムの一般目標

麻酔科専門医として必要な知識と技能を習得し、あらゆる状況に対処できる医師を育成する。

研修プログラムの特徴

- 1、麻酔科専門医として独り立ちできる。
- 2、厚生労働省が認定する麻酔科標榜医、日本麻酔科学会が認定する麻酔科認定医の資格取得が可能。
- 3、救急手術症例が多く含まれる年間4000例程度の偏りのない豊富な症例を経験できる。
- 4、ペインクリニック、緩和ケア病棟での研修が可能。
- 5、臨床研究、国内外の学会発表、医学論文作成等の機会が豊富にあり、指導体制が充実している。
- 6、希望者は後期研修と並行して大学院への進学が可能である。
- 7、研修終了後の進路の選択肢が豊富である。

研修プログラムの内容

プログラムは個人の希望を考慮して決められるが、最大限の効果をあげるであろう1例を示す。

1年目

麻酔科研修の根幹をなす術前患者評価、術中管理、術後管理について学ぶ。これらは、すべて指導医のマンツーマン指導が受けられる。卒後臨床研修を受け

ていないものにはさらに懇切丁寧に指導を行う。2年間の初期研修の段階では制限されていた頸部、胸部硬膜外麻酔、神経ブロックなどを含む手術室麻酔に関連するすべての手技が実践、習得可能である。

2年目

一定期間ペインクリニックにおいて外来患者、入院患者の疼痛管理を通じて慢性痛についての治療トレーニングを受ける。さらに希望者には癌患者の緩和ケア病棟での研修が可能である。手術室での麻酔管理に関しては、1年目に習得した技術をさらに確実なものとするため、症例を積み重ねていく。より高度な麻酔症例も経験していく。当直業務にも加わり、緊急手術の対応のトレーニングを受ける。麻酔科研修を2年間行うと厚生労働省が定める麻酔科標榜医の資格申請を行い、取得することができる。

3年目

単独での麻酔管理を原則として、麻酔専門医としても独り立ちを目指す。手術室のチーフ指導医の補佐を経験し、手術室運営に関するマネジメントを学ぶ。また学生の指導を経験し、指導法についての教育を受ける。麻酔科標榜医の資格を持ち、かつ日本麻酔科学会に3年間所属すると日本麻酔科学会の認定医を取得できる。

研修プログラムの個別（行動）目標

- 1、術前評価ができる。
- 2、麻酔計画の立案ができる。
- 3、麻酔計画に則り、麻酔準備ができる。
- 4、麻酔計画に則り、麻酔を実行できる。
- 5、気道確保困難患者の気道確保ができる。
- 6、挿管困難患者で適切な挿管方法を選択し、実践できる。
- 7、胸部、腰部硬膜外カテーテル挿入ができ、適切に使用する。
- 8、脊髄くも膜下麻酔を施行し、適切に患者管理ができる。
- 9、各種静脈麻酔薬、麻薬、筋弛緩薬を適切に使用できる。
- 10、分離肺換気用チューブを使用し、分離肺換気ができる。
- 11、各種カテコーラミンの使い分けができる。

- 1 2、 心臓手術の麻酔法を理解する。
- 1 3、 肺動脈カテーテルの挿入とデータの解釈ができる。
- 1 4、 経食道心エコーの挿入とデータの解釈ができる。
- 1 5、 術後鎮痛法の基本原則や方法を理解し、実践できる。
- 1 6、 新生児、小児の麻酔法を理解する。
- 1 7、 フルストマック等の緊急手術の麻酔の注意点を理解する。
- 1 8、 患者の鎮静方法を理解する。
- 1 9、 各種神経ブロックの適応、方法、合併症を理解する。
- 2 0、 慢性疼痛管理について理解する。
- 2 1、 ペインクリニックで行う処置を一通り経験する。
- 2 2、 癌性疼痛管理について理解する。

研修終了後

大学付属病院での診療、研究あるいは和歌山県下を中心とした関連病院への出張、日本全国にまたがる特色ある施設への国内留学、アメリカを中心とする海外留学などいくつかの選択肢がある。大学院への進学もこの時期にも可能である。進路は、個人の希望を最大限考慮することはいうまでもない。さらに麻酔業務を続ければ、日本麻酔科学会認定の専門医さらに指導医、日本ペインクリニック学会の認定医などいくつかの資格取得が可能である。これら各種資格の取得に関してのサポート体制は万全である。

その他

女性医師においては、出産、育児等で研修が中断される可能性があるが、柔軟な勤務体制により、キャリアの途絶がおこらないように努めている。現在も多くの女性医師が、育児をしながら活躍している。